

# 愛でればこそその桜花

山口県 仁平寺住職 田中 た なか 大道 だい どう

---

今朝は愛でればこそその桜花というお話です。

四月初旬の山口はまだ寒く、私はストーブの薪を取るため近くの小屋にむかいました。小屋の傍らには見事な山桜の木があります。満開の白い花が咲くと紺碧の空に映えてそれはそれは美しい光景です。

その日も朝早くから一眼レフのカメラを手にした愛好家達が熱心にその山桜を撮影していました。足下には薺やタンポポなどの草花が咲いていましたが誰ひとり見向きもしません。山桜を写す人達にとって薺やタンポポはただの草なのでしょう。

私はある出来事を思い出しました。

お檀家の竹之内さんが春先に寺に来られ、「方丈さん家 うち の桜の木を切るんじゃが薪にいらんかね？」と言ってくくださったのです。早速見に行くとその桜の大木は春を前に今にも花を咲かせようと蕾をピンクに色付かせています。私が思わず「薪はよろこんで頂きますが、こんな立派な桜を切ってしまうのはもったいなくないですか？」と尋ねると竹之内さんは笑いながら「畑が影になるからね。桜の木いうても、わしらにとっては草とかわらんよ。」と言われました。「愛でればこそその桜花。厭えばそれは草になる。」

そういえば、昨日私が出先から帰って来ると二歳になる娘がタンポポを小さな花瓶に生けながら「お花きれいね」と言っていました。娘にとってタンポポは花なのでしよう。